# 今村組

## 輝きよ炎のように

### 関西京都今村組が8年ぶりに能登町でライブ

今村克彦氏率いるアマチュアダンスチーム「関西京都今村組」は8年前、旧能都町の中学校総合的学習として来町した。今村組に声をかけたのは今井藤吉郎先生（当時）。「すてきな大人に会わせたい。心の込め方の上手な大人になってほしい」という強い思いがライブを実現させた。

子どもたちや保護者、ボランティアスタッフらは、100本以上の手作りのぼり旗と手作りのステージで今村組を迎えた。ステージと客席が、踊り子と観客が一体となったすばらしいライブ。今村組は子どもたちとこの町に、大きなお土産を残していってくれた。

「必ずこの町に戻ってきます」とライブを締めくくった今村先生（当時京都府小学校教員）は、ライブ終了後「今村組の原点のようなライブだった」と振り返ったという。

昨年10月、能登町PTA連合会主催の講演会に今村先生が呼ばれた。会場の前席には、8年前のライブを見たお母さんたちがいた。

「おかえりなさい」

今村先生は講演の冒頭5分間、号泣したという。年間約100本の講演をこなす今村先生が初めて講演中に見せた涙。今村先生にとっても能登は特別な場所だった。

「来年の夏、今村組を連れて能登町に来ます」

講演の最後、今村先生は能登町でのライブを宣言。その思いを聞いた今井先生は、再び今村組ライブのために汗を流すことを決意した。

報酬なしのライブであっても、音響、照明、ステージ、宿泊とお金はかかる。今井先生らは、有志と共に「今村組ライブ歓迎実行委員会」を結成。たくさんの団体や個人に声をかけ、協力を求めた。

8月7日、宇出津港いやさか広場に約1500人が詰めかけた。今村組44人による8年ぶりのライブが幕を開けた。

**同じ時間、同じ場所で、同じ思いを共有した約1500人。紙面でライブの感動を伝えることはできない。それでも、今村組が能登町の子どもたちに、そして大人たちに何を残し伝えたか―。ライブでの今村先生のメッセージをここに残したい。**

## 何とも言えない気持ち

「今村組、8年ぶりに能登町に帰ってきました。当時80人だった今村組は8年たった今、近畿各地に350人という大所帯になりました。本当に何とも言えない気持ちですが、皆さんと楽しい夏の夜を過ごしたいと思います」

## 生きる意味がある

「今村組はいろいろな所に踊りに行きます。お礼をもらうこともあります。能登は僕が来たいと言いました。だからお礼は一切もらってません。それでもこれだけのお金を使って、人を使って、たくさんの人が迎えてくれます。今の子どもたちにとって、こういう場がもっともっとできることが大事だと思います。

僕が心の師と仰ぐ河島英五さんは阪神大震災の復興を願って「復興の詩（うた）」というライブを10年続けたいとやられて、5年目に亡くなられました。その思いを継いで、今村組は夕張に10年踊りに行くことに決めました。マスコミが騒いで、今夕張のことを誰も忘れています。今年は3年目で10年続けたいと思っています。

夕張は本当にお金がなくて、僕たちは機材を背負って飛行機に乗るんですが、客席はみかん箱に板を引いて、おじいちゃんおばあちゃんばっかりです。

今年、一人のおばあちゃんから新聞紙にくるんだ小さい花束をもらいました。『お庭に咲いていたスズランです』と言って渡されました。僕は53年間生きてきて、これほどうれしい花束をもらったことはありません。

そしてライブが終わって、あるおばあちゃんが僕の所に来て、僕の手を本当にしっかり握りしめて『今年の春に一人息子が亡くなりました。今一人で市営住宅にいます。もう死のうと思っていました。でも、来年皆さんが来てくれるのを待っています』と涙で言われました。

僕はこのとき、僕らのいる意味があると思いました。そして、そういうことをこれからも子どもたちにやらせていきたいと思いました。それが今村組です。

能登の若い人たちも、あなたたちがここで生きている意味があるんです。あなたたちにしかできないことがあるんです。あなたたちでしかダメな人がきっといるんです。そのことを信じて一生懸命生きていってほしいと思います。

夕張のために作った曲があります。この町も同じだと思います。夕張と全国の人が少なくなっている町を思い浮かべてください。そして共に元気に進んでいきましょう」

## 一人のためだけのライブ

「今年の新作に『龍海（たつみ）』という曲があります。今村組をずっと応援してくれる人の中にタツミさんという愛知県のあるお母さんがいて、応援し始めてくれた8年ぐらいまえから脳腫瘍で、あと1、2年の命と言われてました。ずっと僕や今村組のライブに応援に来てくれて、本当に頑張って7年、8年と命をつないでこられた方でした。

もう本当にダメらしいということを聞いて、どうしてもタツミさんのために今村組のライブをやってみたかったし、一人のために若者たちが動くということを経験させたかったんです。『タツミさん一人のためにライブをやりたい。お金もかかることやし、来れるやつだけでいいから来てくれ』とみんなにメールしました。当時300人の今村組で、踊りに来てくれたのが100人、応援に来てくれたのが40人。学校の先生とけんかしてまで来てくれました。

自分のお金で集まった今村組がたった一人のためにライブをやりました。それが今年の春です。僕は、タツミさんとタツミさんの向こうにいる皆さんのような人のために『龍海』という曲を作ってみたかった。今年、その曲で札幌YOSAKOIソーランに行ってきました。出場305チームの中で、悲願の決勝10チームに残れました。4位という結果でしたが、その10日後、タツミさんはこの世を去られて、お通夜にも踊りに行きました。

何の得にもならないことかもしれません。でも、子どもたちにそういうことが大事なんだと教えていきたいと思っています。今年決勝に残れたのは僕たちの思いが届いたのではなくて、タツミさんが僕たちを決勝にのせてくれたんだと思います。

万感の思いを込めて、能登町の皆さんに届けたいと思います」

## 共に育つ『共育』

「お別れではなく、能登町と今村組の新しい歴史が始まったんだと思います。

僕はいつも『共育』ということを言います。学校に行けない子、生き方に悩んでいる子、家庭にたくさん問題を抱えてる子、お父さんがいなくなって、お母さんの頑張る姿がうれしいけれども重荷になってる子、今村組にはいろいろな子がいます。今日、皆さんの笑顔をこの子たちに与えてくれたことは、この子たちにとっても大きいことです。明日から学校に行けるようになるとは思いません。でもこの子たちが苦しいとき、今日のこの風景を思い出すと思います。そして前に向かって生きると思います。

『共育』とはこんなことなんです。一緒に、共に何かを感じ合うことだと思います。皆さんの熱い思いは決して無駄にしません。

今ここにいる能登の若い子たちは輝いています。この子たちの笑顔を信じて、この町を支えていってください。そして今村組が必要なときはいつでも呼んでください。いつでも来ます。どんなに時が流れても今村組は変わりません。必ずまた能登に戻ってきます。

子どもたちの笑顔を信じて、
この町を支えていってください。
今村組は変わりません。
必ず能登に帰ってきます。

# ありがとう今村組。いつかまた共に―

INTERVIEW

**8年ぶりに来町した今村組と今村克彦先生。多忙なスケジュールの中、ライブ直前に広報紙へのインタビューに応じてくれた。**

**今村克彦（いまむら・かつひこ）**

1957年生まれ。1997年、子どもたちが輝いた顔で生きられるようにしてやりたいと今村組を結成。学校や家庭に悩みを持つ子どもたちや「不良」と言われる子が、踊りを通して生き直しをするダンス集団としてＴＶ・マスコミで紹介され有名に。2006年、24年間勤めた京都府小学校教師を辞し、在野の「共育者」として進むことを決意。独自の活動を展開中。著書に『夢の見つけ方教えたる』（祥伝社）など

**―8年前を振り返って**

当時は、今村組がテレビに出始めたころでした。その後、今村組がどんどん有名になっていって、いろいろなバッシングを受けるようになりました。一時80人くらいまで増えたメンバーが、世の中の噂やバッシングで25人くらいまで減って、壊滅の危機を迎えたんです。良かった時にこの町に来て、7年間いろんな苦しいことが続きました。

それで昨年10月の講演会で能登町に来たら、古里に帰ってきたみたいに迎えてくれました。その時、今の今村組の子どもたちをこの町に連れてきたいと思ったんです。今、ここに帰ってきて何とも言えない気持ちです。僕の著書にもこの町のことを書いてますし、ずっと忘れていなかったですね。

**―今村組とは**

現在、近畿地方に12の今村組があって約３５０人います。学校とか家庭に問題ある子が大半ですが、学校に行かない子でも今村組の練習は10秒たりとも遅れずに来たり、悩みを先生ではなく僕に話してくれたりします。その子らにとって今村組は理想の学校なのかも知れません。

**―なぜ踊りを**

踊りほど人の心を投影する表現はありません。同じチームで同じ曲を踊っても、その時の思いでまったく違うものになるんです。そういう意味では、腐った人間にはいい踊りはできません。いつも輝いて、前向きで、弱者に目を向けられる人間でないと、人を感動させる踊りはできないんです。踊りのクオリティーを上げるためには、ダンサーのスキルと内面の両方を上げなければならない。だからスキルはずっと追求していきたいと思っています。

**―共育とは**

共育とは一方的なものではありません。人の悩みを聞いても、「こんな悩みがあるんや」と自分の勉強になったりします。例えば、今村組の踊りを見たおばあちゃんが、若い者もまだまだ捨てたもんじゃないと思う。年寄りなんてと思っていた彼女たちが「よかったで～」と言われたことで、おばあちゃんの存在を認めていく―。これは彼女たちがおばあちゃんを共育して、おばあちゃんが彼女たちを共育しているんです。共育とはお互いの作業であり、僕らはその間をプロデュースするだけです。

**―親はどうあるべきか**

僕は自分の子どもに、いつもこう言っています。『俺は先に死ぬ。大人は先に死ぬ。親にとって、大人にとっていい子でいるよりも、一緒に生きる仲間にとっていい子でいることが大事や』って。

親は子どもを産んで親になれるものではないんです。親というのはゴールのない、死ぬまで努力し続ける作業であり、悩み続ける役割なんです。もっともっと悩まないとだめです。『あのとき、こうして良かったのか』『ああ言えば良かったんじゃないだろうか』と自分に返すことを意識的にしていかないと、どんどん子どものことが見えなくなります。

僕は今でも今村組の子どもたちに対して後悔ばかりです。夜も眠れないほど後悔をして、次に後悔したくないから頑張るんです。

**―先生の夢は**

夢は見るもの。追いかけるものです。誤解されるかもしれませんが、僕は子どもたちに「夢は見るな。野望を持て」と言ってます。「野望」は努力してつかみ取るものです。「お金持ちになりたい」でもいい。小さなことでもいいから野望をもって、それをつかみ取る努力をして進んでほしいと思っています。

だから僕には野望はあっても夢はないんです。ただ満足して死にたくないと思ってます。90歳になって死ぬ間際にも『あと一年あったらこれができるのに』って言って死にたい。

死ぬまで走り続けたいですね。